

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作:ウッチャン大好きっ子

\* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

今回は無しです。

### 解説 (既に存在する言葉について)

1. 白眼・・・冷たい眼差し、冷遇のする事(眼差し)

### 解説 (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. 治癒術・・・気功術の中でも上級に位置する技である。名前の通り傷や体力を癒す技である。  
この技はいかに気功術に長けていても出来る者と出来ない者がいる。

武器説明

1. デザートイーグル・・・全長260 mm・重量2040 g・口径 357/41/44/50 口径・総弾数7発  
世界有数の大口径自動拳銃です。  
本来は熊などの狩猟用を目的とした銃だけに射撃時の反動は凄まじく、  
女子供が撃つと肩の骨が外れるほどの威力と云われている。  
通称「ハンドキャノン」
2. ベレットオート9・・・総弾数20発強・全長300 mm 強で大きい拳銃ながら3点バースト射撃  
(一度引き金を引くことで、決められた数の弾丸が発射され、それ以上の弾は  
発射されない機能のこと。  
3点バーストだったら一度で3発の弾が連続発射される。)が可能な機関拳銃  
となっている。  
使用している有名映画では、『ロボコップ』でロボコップが使用していた銃です。
3. ザウエルP230・・・全長260 mm・重量420 mm・口径9 mm×17・総弾数7発  
コンパクトながら優れた重心バランスやグリップに握り易さ、簡易化された構造  
をしています。  
日本ではSPが制式採用している他、警視庁や警察庁でもミネベア M60 に代  
わる制式拳銃としてトライアル中との噂である。  
『恋人はスナイパー 劇場版』できなこが持っていた拳銃です。  
(ノベライズに書いてある物もこの系統の物ですが、形はハリウッド映画でFBI  
刑事が持っている四角い感じの銃で違う物です。)
4. H&K PSG1・・・全長1208 m・重量8.1 kg・口径 7.62mmx51・総弾数20発  
世界最高の精度を持つ狙撃ライフル。

狙撃銃の最高峰と評され性能的には文句のつけようがない PSG1 だが、最大の欠点は精度の高い部品のみ作られているため当然コストも高く、1挺 7000ドルと非常に高価な事である。

映画では『キルビル』でオーレン・イシイ が使用したライフルです。

~ 第96章 ~ <一つの体に二つの心>

- 凱歌との鍛錬の翌日 -

まだ夜も空け切らぬ頃、龍牙は目を覚ました。

準備などを終え、かなり深夜に休んだが、昨日の事もあり、はっきりいうとちゃんと眠れなかったのである。

龍牙は意外と後に引きずる性格だった。というよりも考え出すとトコトン考える質だった。

仕方がないので龍牙は起き、ちゃっちゃと着替えを済ませると自室を出た。

龍牙は静まり返った施設を足音を立てずに進んで行った。

龍牙が足を突然止めた。

(そこは今まで一度も出て来なかった部屋だった。)

龍牙は扉の横にあるIDコードを入力する電子盤に自分のIDを手早く入れた。

そして扉が開いた。そこは暗闇だった。光一つ、音一つなかった。

ここは”暗箱”。凱歌が鍛錬の為に使っていた”明箱”の対になる部屋である。

この部屋は精神を鍛える為にあるものの、あまりにも危険な為に天山は元よりプロフェッサーすら滅多に使わない部屋である。

その為、龍牙が一人になれる部屋として使っている事が多い。

しかし、今日の龍牙はただ一人になりたいが為に、ここを選んだのではなかった。

1度試してみたかった事があったのである。それを誰にも見られたくないので試すチャンスを探していたのである。

そして、この誰もが眠りについている時間が、龍牙にはチャンスに思えたのである。

龍牙は扉が閉まり、光そして音の無い部屋の中に立ち尽くしていた。

この光が全く無い完全な闇の中であっても龍牙にはしっかりと周りが見えていた。

それは周囲の気配を感じるのではなく、本当に視覚で見ることが出来るのである。

これも龍牙が人間離れしている所であるが、夜行性の動物の性質を兼ね備えている為である。

もちろん普通の人間の中にも、ずば抜けた夜目を持つ者はいる。その人間の遺伝子が混ざっているのも事実である。慣れた足取りで部屋の真ん中に正座をすと目を閉じ、ある者に呼び掛けを始めた。

暗く大人が一人寝れるぐらいの狭い部屋に、壁に背を預け片膝を曲げる格好で座る男のシルエットがぼんやりと見えた。

彼は、静かに俯いていた。それは眠っているかの様に目を閉じ、じっとしていた。

その時、突然目を開き、立ち上がった。そして周囲の気配を読む様にじっとした。

何かを感じたのか突然口元を緩めた。すると突然その姿が揺らぎ、消えてしまった。

龍牙が暫し目を閉じ呼び掛けをしていると、突然頭に声が響き渡った。

『一体何用だ！この俺様を呼び出そうとはいいい度胸だな。』と。

龍冴はその声を聞くや口元を緩め目を開けた。すると龍冴の目には自分の後ろに立つ自分の姿が見えた。それはもちろん実体でも自分自身でもはなかった。

そう、そこに立つのは紅髪、紅眼の禍悪主だった。

龍冴はこの何も無い闇の中で禍悪主に呼び出したのである。

『全く。くだらない事をこんな朝っぱらからやりやがって。というか何でこんな事をしようとした？』と禍悪主は冷たい眼差しを向けながら言った。

「すまない。でもどうしても君と話をしたかったんだ。」と龍冴は禍悪主を見つめ言った。

『君？まあいい。一体なんだ、お前一人で解決できない事でもあるのか？』と少し興味を持ったらしく龍冴を見る眼差しを変え、禍悪主が言った。

「お前も知っているだろう？凱歌があの方の事を思い出したらしい事を・・・。」と深刻そうに眼差しを禍悪主に向け、龍冴は言った。

『その事が・・・。確かに可能性は高いが、それは一緒に居ればいつかは起きうる事だと分かっていたはずだ。それにお前がここで悩んでも仕方のない事だろうが、だが、今はお前の知る真実を語る時ではない事は分かっているな？』と禍悪主は上を見上げながら言った。

「分かっている。いくら真実であっても環境とタイミングの合わない真実は危険だ。

それにこれにはまだ証拠が足りない・・・。いや、何者にも変え難い証拠があるが、それは使えない。」と龍冴が下唇を噛んだ。

『側にあって使えない証拠か・・・。皮肉なものだ。俺様達の選択がこうして今も尾を引くとはな。』と禍悪主は何かを思い出しながら言った。二人は互いに背を向き合い、黙ってしまった。

しばらくすると禍悪主が静かに俯き座る龍冴を見ながら口を開いた。

『もし聞かれたらどうする？博士と話していた方法を使うのか？』と禍悪主は訊いた。

「それしか方法が無い。それにそれ以外の方法が思い付かない。

凱歌に嘘を付くのは辛いが、それも凱歌の為だ。これ以上はアイツを苦しめたくない。」と考え詰め出した結論を龍冴は禍悪主の顔を見上げながら言った。

『確かに下手な事をすれば、アイツの事が勘付く。いざとなれば俺様を使え。』と禍悪主は言った。

その言葉に龍冴が驚いた。なぜなら凱歌の為に身を切るというのである。

驚いていると禍悪主は静かに『それじゃあ、俺様は帰る。あとは自分で何とかしろ。』と言った。

そして最後にこう付け加えた。『また相談に來い。俺様で良ければ乗ってやる。』と。

その声は少し恥ずかしさが入っていた。

そして室内に禍悪主の気配が消え、龍冴は静かに立ち上がり部屋を出た。

すでに朝6時になっていた。とても短い時間を感じたがかなりの時間が経っていた。

龍冴は静かに皆が来るであろうミーティングルームに向かった。

その後ろには壁に寄り掛かり歩いていく龍冴の見つめる禍悪主が居る様に見えた。

それはまるで友の旅立ちを静かに見送る様だった・・・。

#### ～第97章～ <記憶の女性>

龍冴が部屋に入るとそこには、凱歌が立っていた。

両者共に驚く事も無く、軽く挨拶をすると龍冴は自分の席の前に凱歌を促し、席に付いた。

凱歌は促されるまま椅子に座った。

二人は話を切り出せず、沈黙が広がった。

そんな沈黙がしばらく続いた後、二人は同時に口を開いた。

互いに譲り合っけてしまい話がなかなか進まなかったが、最終的に凱歌が話す事になった。

「龍冴さん、訊きたい事があります。」と凱歌は意を決して龍冴に言った。

龍冴は黙った凱歌を見つめていた。その目には龍冴自身も意を決めたような光が宿っていた。

凱歌はその光を受け、話を続ける事にした。

「僕が心の中で色々な部屋に入って色々な事を見ました。

それは辛い事、悲しい事、嬉しい事など色々ありました。その中で一つどうしても分からない事。

しかも龍冴さんに関係がある様でならないものが一つあるんです。」と凱歌は言うとうどう話すか頭で整理し直す為少し間を置いた。

その間、龍冴は目を閉じ、じっと凱歌が話すのを待っていた。

そして凱歌は整理を付け、話の続きを始めた。

「その訊きたい事は僕が家族との記憶の部屋で、まだ物心つく前の記憶に出てきた女性の事です。

その女性は僕をとて大切そうにいとおしそうに見ていた。それに横にはそれを嬉しそうに見ている男の子が居ました。

僕はその女性に凄く親近感というその…。何か特別なものを感じたんです。

そしてその女性が、龍冴さんに似てたんです。まるで親子の様に…。」と目を閉じ訊く龍冴を見つめ、凱歌は言った。凱歌は龍冴からの答えを待っていた。

しかし、龍冴はすぐには答えなかった。何かを考えている様だった。

再び沈黙が室内に充満していた。

「その疑問に答えるのは俺の出生の事をもう少し知る必要がある。

俺がこの世界の法則に反しているのは知っているな。

俺には親と呼べる対象は居ない。だが姿のモデルなった人間はちゃんと存在する。

この顔とかはそのモデルのDHAからで、ほとんどいじっていない。

モデルになった人間は4人。顔立ちが男1人と女性2人、体型が男1人の計4人とプロフェッサーから聞いている。

つまり見た目が似ているという事は、その女性は顔立ちのモデルになった女性二人のどちらかが凱歌の記憶に残る女性の可能性がある。

その時代では珍しい女性の特徴を持つ男を作ろうとした。今の時代を見越した様にな。

しかし、それだけ情報なら残っているはずだが、何せ古いものだし特級極秘情報扱いだらうから手に入れるまで時間がかかると思う。

もちろんプロフェッサーにも訊いてみるが、誰かまで覚えてるか…。

だが偶然とか運命というものを信じていないが面白いものだ。ちゃんと調べられるだけ調べてみるよ。

しかし、まだまだ君には秘密がありそうだな…。」と龍冴が意味深な事を言った。

凱歌はその言葉に首を傾げたが、あの女性の事が少しでも分かるかもしれない事に嬉しくなった。

しかし、その一方で龍冴はその場が丸く収まった安堵感と罪悪感に複雑に苛まれていた。

『いつかは君に真実を語る時が来るのか…。俺に真実を語る資格があるのか…。』と龍冴は自問自答していた。

「さて、今日の事を凱歌にだけ先に教えておこうかな。」と龍冴は気持ちを切り替え言い出した。凱歌が興味を示し、耳を傾けようとした時だった扉が開く音がした。

「その前に龍冴はしなければいけない事があるでしょうが！」と室内に、入るなり怒鳴った。二人が入ってきた者を見るとそこには天山が居た。

龍冴はその言葉に天井を見て、その天山の視線から逃れようとしていた。

「もう先延ばし出来ませんよ！アレだけ貯めたらやるしかないでしょうが！それに貴方がやらないと捜査が進まないんですよ。今日は私も手伝いますからやりますよ！」と天山は言った。

「え～！だって面倒なんだもん！大体捜査が難航しているからって他人に頼るなよ！それに - 」と龍冴が御託を並べていると天山が怒りでワナワナと震え始めた。

「御託並べんでさっさとやらないか！！」と天山は一括した。その姿はまさに怒り狂う不動明王の様だった。

これほどの怒る天山を初めて凱歌は見た。

あまりの天山の怒りに龍冴は「はい。」と言い、そそくさと準備を始めた。不動明王と化した天山が仁王立ちをして見ている中で、龍冴の悲鳴が響いた。凱歌が見ると、龍冴は大量の書類に埋もれていた。

「だから言っただろうが、こんなに貯まる前にやればいいものを。それにまだありますから。取り合えずそれを片しますか。」と天山は龍冴を助けず書類をまとめ机の上に分けていった。

龍冴は「薄情者！」と言わんばかりの顔をしながら書類を運んでいた。凱歌は足元に飛んできた書類を数枚拾い見た。それは殺人事件など詳細な資料だった。それも世界各地のもので、様々な言葉で書かれていた。そして、書類を全て区分けを終え、机には天井に付かんばかりの書類の柱が6本近く出来ていた。別の机に座る龍冴の元に続き、天山から事件の資料が運ばれ、それを龍冴が読み意見を書き込んでいく。

そのスピードは異常だった。その書類を読むにしても速読にしても早すぎる。そして事件解決の為の意見をその国の言葉で適切に書き込んで行く。天山もそのスピードに合わせて的確に次の資料を持って来る。相手の事を理解しているから出来るものだった。

凱歌は中国語で書かれたその龍冴の書く意見書を見た。その事件は密室殺人で犯人とされる女にはアリバイがあるというものだった。完璧過ぎるのである。そして完全犯罪で時効も、まじかに迫っていた。

龍冴はその女の詳細な情報などからアリバイを崩す方法と密室にした方法。そして殺害動機も書いていた。それを読む限りではまさに事件は解決したと凱歌は思った。

それから二時間ほどで机の上にあった書類の山は消えたが、次の山が既に出来ており、龍冴は書類に目を通し続ける事になった。

その間、龍冴は一向に書類が置かれている机を見なかった。そして更に一時間が経った頃、蒼凱やプロフェッサーがやってきた。龍冴の事には気にも留めず、お茶を飲んでいく。

凱歌は二人共、何も言わないのでこれがここでは見慣れた光景なのだと思った。

- それから一時間が経過した。(午前10時)

きなこが遅れて部屋に入って来た時に「終わった～！！」と龍冴の声が響いた。

居眠りをしていたプロフェッサーと何が起きたか分からない、きなこはビックリしていた。

凱歌はきなこに簡単に今までの事を教えてあげた。

「全くやる気になればすぐなんですから、毎日すればいいんですよ！」

これも貴方の仕事でしょうが。」と天山が飽きれて言っていた。

その場に居る人間が全員「そうだ。」と頷いていた。

「だって俺嫌いなんだよ。書類に見通すのが…。」

大体自分の国で起きた事は自分達で解決して欲しいんだよ。」と龍冴は言った。

「それが出来ないからここに来るでしょうが、それに解決できずに被害者が泣き寝入りはあってはいけないんです。」と天山は言った。

「それはそうだけど…。あ～もう～！」と頭を掻きながら龍冴が席を立った。

何を言ってもここでは勝ち目など無いし、天山が言っている事が正しいのは龍冴が一番よく分かっていた。

そんな時、書類を入れていた棚に縦40 cm、横25 cmほどの封筒が新たに落ちてきた。

それに気が付いた蒼凱がそれを拾い上げ、開けようとした時だった。

「蒼凱。その予定を説明するから来てくれ。」と龍冴に呼ばれ、「まあいいか。急ぎの物では無い様だし。」とその封筒を再び棚の中に置いた。

しかし、それが後でとんでもない事を巻き起こす事となる。誰も考えつかなかった事が…。

そんな事とはつい知らず、龍冴は今日の予定を提示した。

それには、きなこは龍冴とプロフェッサーと共に鍛錬をする。

凱歌は蒼凱と天山とする事になった。

龍冴達は事前に話し合いをしていたらしく、簡単な内容確認をするだけだった。

二人には何も教えられなかった。そして、朝食を摂り準備を整え、それぞれの鍛錬場に向かった。

～第98章～ <水の力>

きなこがやってきたのは室内プールだった。

きなこは中に入るなり「ここには何でもあるんだ！」と驚いてしまった。

そしてきなこは、何をするのか分からず龍冴達を見た。

「もちろん泳ぐ訳じゃない。ここでするのは…。」と龍冴が居るとプロフェッサーをいきなりプールに落した。いきなりの事に驚いて助けようとする、きなこを止めて見る様に合図した。

驚いて見ると、そこには大きなシャボン玉に包まれている様なプロフェッサーが見えた。

「驚かせてすまない。実はな。あれは”気壁”を利用したものだ。

安定して円形の気壁を作り出す事が出来ればこの様に水の中で濡れずに居られる。

しかも空気も包むので呼吸も一定間出来る。

きなこさんには、あそこまで出来なくてもいいが、瞬時に安定した完璧な気壁を作れる様になって欲しい。

きなこさんには納得がいけないかもしれないが、凱歌には恐らく気壁を安定して作る事は出来ない。

アレほどの強度のものは小さな物、つまり盾のような物は作れてもこれほどの規模の物は作れない。

それは性質的な面からも、属性の面からも明らかなんだ。

きなこさんはその点とても優れている。

それに気壁は何も味方を守るだけの使い方ばかりでは無い。」と龍冴は言うとプールから上がったばかりのプロフェッサーに右手をかざした。

するとプロフェッサーの体が気壁に包まれた。そして出られなくなってしまった。

「この様に相手の動きを封じる事も出来るし、攻撃を弾く事も出来る。

今は見える様に作っているが練習すればこの様に見えなくも出来る。」と龍冴が言っている間に先程まで見えていた気壁が見えなくなっていたが、プロフェッサーはまだ出られずにいた。

そして龍冴は気壁を消した。

「分かりました。特性を活かすって事ですよな。」ときなこは言った。

「その通りだ。それに凱歌には上手く出来ない事でも、きなこさんなら出来る事が沢山ある。」と龍冴が言った。

その時、プロフェッサーが近づいてきた。完璧に怒っていた。「人をコケにしている。」と文句を言っていた。

龍冴も「悪かった！」と謝っていた。

そして、機嫌を直したプロフェッサーと共に指導を始めた。

きなこはその持ち前の負けず嫌い性格と器用さで上達していた。

そして昼食前には完璧に水中での気壁作成を成功させた。

その上達振りに二人は更に高度な技を教える事にした。

「まさか、こんなに早く出来ちゃうとは…。こうなったらアレを教えちゃいますか？」と龍冴がプロフェッサーに笑顔で言った。

「これ以上、一般人離れしちゃっていいのか？」とプロフェッサーと龍冴から離れた所にいるきなこを見ながら言った。

「ここまでできてそれを言うのか？でもこの技は出来れば喜ばれるんじゃないかな。」と龍冴も振り返り、きなこを見ながら言った。そして二人は教える事に決めた。

午後になり、プールから”武道場1”に練習場を移し、二人は真剣な顔をしてきなこを待っていた。その二人の表情に、きなこはこれから行う鍛錬内容に不安を覚えた。

「そんなに緊張する事は無い。

午前中に気壁が出来ちゃうと思ってなかったの、急遽大技を用意させて貰いました。」と龍冴が笑顔で言った。

「大技といっても難易度的には、先の気壁より2倍ほど難しいほど。

これが出来る様になると色々な所で役に立つが、人からは…。」とプロフェッサーは続きを言わなかった。

「何なんですか？その技って…。」ときなこは続きを言わないプロフェッサーの行動に不安が増してしまった。

すると龍冴とプロフェッサーは顔を見合わせると龍冴が胸ポケットからバタフライナイフを取り出した。その刃を静かに自らの左腕に当て10 cmほど引いた。

龍冴の左腕から鮮血が流れ落ち始めた。

その傷をきなこに見せ、プロフェッサーの顔を見た。そして互いに頷いた。

「これからする事をしっかり見ているんだ。プロフェッサー頼む。」と龍冴が言った。

プロフェッサーはそっと鮮血が流れ出す傷の上に両手の甲をクロスさせる様にかざした。

そして目を閉じ意識を集中させ始めた。すると両手から淡い光が出始めた。

その光にきなこは覚えたががあった。それはあの”カプセル”の光に似ていた。

そうこうしている内にプロフェッサーが両手を降ろし離れた。

その表情は手慣れている感じで笑顔だった。

龍冴は血で汚れた傷口を拭き、きなこに再び見せた。そこには傷は無かった。

「驚かせてしまってすまない。しかし、もう分かったと思う。これからやるのはこの”治癒術”と

呼ばれるものだ。これが出来れば色々な所で役に立つが、何も知らない人間を見ると

白眼を向けられるかもしれない…」と龍冴は苦笑いをしながら言った。

「こいつはかなり相性がある。俺にはプロフェッサーの様に上手く出来ない。それはまず気の質。

そして属性が非常に関係してくる。前に聞いたと思うが、属性には大きく攻撃型と防御型の

二つに分けられる。

俺の属性である炎は非常に強い攻撃性を持っている為にこのような癒しには不向きだ。

もちろん凱歌の雷もこの事から分かる様に不向きだ。

それに対してプロフェッサーの属性は地。地は炎とは正反対の非常に強い防御性を持つ。

その為、このような癒しの気が得意だ。そして二つに対応できる属性がある。

それは何にでもなる万能で飛び抜けた所が無い風と、きなこさんの持つ最強の水。

風はどちらの性質も持つが得意も無いというものだが、水はその物通り三つの顔持つ。

攻撃の氷、癒しの水、守りの蒸気の三つ。

しかし属性だけでは決まらない。そこで関わってくるのが気の質。

これは、その人が生まれ持った気の形のようなものだ。

実は属性よりもこちらの質の方が実際は重要となる。

プロフェッサーは属性もそうだが、実は非常に癒しと防御に適する気の質の持ち主だ。

俺は色々な要素を含んでいる為に質として万能な面があるので、ある程度慣らす事が出来る。

そしてこれほど便利な技を、きなこさんだけに、しかも今なのかを説明する。

まず始めたばかりでは、安定して一定量の気を放出出来ないからだ。

二つ目に何故、きなこさんだけかは、凱歌の気の質は非常に攻撃性が強い事が最近はっきりと分かったからだ。

そしてきなこさんの気の質は非常に癒しに向いたものだった事とセンスがあるからだ。

初めに言うておくがこの技は、諸刃の刃だ。

この技の原理は気の力で患部を活性化し、傷を癒すといった感じだ。

これは”カプセル”と理論としては同じでこの技が元になっている。

しかし、活性化し過ぎれば、その患部は変化を起こし、逆に化する。

だから今までに無く真剣に、そして慎重に鍛錬して欲しい。」と龍冴は真剣な顔で言った。

きなこはその話の内容を理解し、しっかりとした声で「はい。」と答えた。

「練習台には俺を使う。普通の人間よりも丈夫だからな。

ここで重要なのは、どんな人間でも助けたいという心と傷が癒えるイメージ。それと幸せな思い出だ。

心にゆとりの無い奴に他人を助ける事は出来ない。」と龍冴と基本を説明すると、再び左腕に先程よりも遥かに小さい傷を付けた。

それから夕方になるまで龍冴の左腕の傷は出来ては消えを繰り返した。  
きなこはその龍冴の痛み answers 様に二人の言葉を聞きながら少しずつコツを掴んでいた。  
そして龍冴はインカムを取り出し誰かを呼び出していた。  
「これが最後の試練だ。」と龍冴は言った。  
しばらくするとノックする音が響いた。入ってきたのは蒼凱と凱歌だった。  
二人ともボロボロだった。  
「二人とも天山に派手にやられた様だな……。こっちとしてはありがたいが。」と龍冴は言った。  
その言葉にきなこは何をするのか分かった。  
「それじゃあ、二人を治してもらいましょうか。」と龍冴がきなこの方に振り返りながら言った。  
凱歌は何を言っているのか分からないといった感じだった。  
しかし、蒼凱には経験があるらしく不安から苦笑いを浮かべていた。  
「あのう、きなこさんの腕前は？」と龍冴に蒼凱が不安そうに訊いた。  
「ほれ！」と龍冴は練習台にした左腕を蒼凱に見せた。  
凱歌もその腕を見た。そこには薄っすらと切り傷の跡が残っていた。  
「これが練習1日目の人間がやったものに見えるか？」と龍冴が満面の笑みで言った。  
「早くホイさん来て！」ときなこの声が響いた。  
凱歌は龍冴の言葉の意味が分からないまま、きなこの元に向かった。  
そして上着を脱がされ、座らされた。  
その擦り傷などの生傷と銃痕などの傷痕だらけで、背に大きな白虎の刺青のある凱歌の体を見て  
きなこは、彼の過去の凄さを感じ胸が詰った。  
そして静かに凱歌の前に立ち、両手をかざし、意識を集中した。  
その心の中にもっとも幸せな時と凱歌の傷を癒したいと願った。  
凱歌は何が始まるのか緊張と不安そして期待にも似たドキドキの中にいた。  
きなこの両手から淡い光が発せられると、凱歌の体が癒されていくのを感じた。  
それはとても暖かく包まれるような感覚にも囚われた。凱歌は静かに目を閉じた。  
そして次に目を開けた時には、鍛錬で受けた傷が無くなっていた。  
それと同時に、体力も多少戻っている事に驚いた。逆にきなこの方は少し疲れている様に見えた。  
「きなこさん、大丈夫？」と凱歌が心配そうに声を掛けた。  
「大丈夫。まだ慣れてないから。」ときなこは答えた。  
「そんなに簡単に出来ちゃったら困るよ。」と龍冴が自分の左腕の傷を治しながら言った。  
「もう分かったと思うが、きなこさんが今日身に付けたのは”治癒術”と呼ばれる傷や体力を癒す  
気功術だ。  
かなり高度な術だが、とてもきなこさんの気に合っている為に、これほど早く身に付けられた。  
しかし、凱歌。君にはこの術は難しいだろう。それは技術とかではなく気の質が合わないと思う。  
俺もそんなに上手くないが、少しだけ出来る。  
プロフェッサーは、きなこさん以上の腕前だ。大体の傷を簡易だが治せる。」と龍冴が言った。  
「確かに凄いですね。今までに何度かこの術を習った人を見ましたが、こんなに早く使いこなした人は  
その中でも2、3人。それもかなり名のある気功士でしたから、きなこさんは本当に凄いですよ。」と  
蒼凱が、きなこに傷を治してもらいながら言った。  
きなこはその言葉に動揺したらしく不安定になってしまい、慌ててプロフェッサーが手をかざし、

安定させた。

「心が揺らぐのはこの術において厳禁じゃ。といってもそんなに誉められれば、誰だって不安定になるがな。」とプロフェッサーが手助けをしながら言った。

そして傷の癒えた二人は上着を着ながら立ち上がった。

その時、”武道場1”の扉が開いた。そこには天山が立っていた。

「これで鍛錬第二段階終了かな？」と天山は笑顔で言った。

「そうだな。明日は一つやってもらいたい事がある。当事者は辛いかもしれないがな。」と龍牙は言った。

「まさか…。信頼してないんですか！？」と蒼凱が言った。

「信頼して無い訳ではない。だが、実際に見た訳ではないからな。

俺としては自分の目で確かめてないものは、信じないと考えているんでね。」と龍牙は真剣な表情で言った。

そして恒例と化していた宴会のような騒がしい夕食が行われたが、今回だけはお酒が制限された。明日は完璧な状態でいて欲しいとの事だった。

きなこは少し残念がったが、「飲めないよりはマシ。」とコップに注がれたビールと一気飲みした。その様はまさに仕事を終えたお父さんであった。今回は明日に備えて早い内にお開きになった。

きなこは夕食では元気にしていたがそれは演技だった。

本当は食事もせず、そのまま寝たかったが、龍牙にしっかりと食べる様に釘を刺されていた。

部屋に戻るなり、ベットに倒れ込みそのまま深い眠りに落ちてしまった。

凱歌は食事を済ませ、部屋に戻ると明日の事を考えていた。

龍牙の言葉が引っ掛かっていた。

凱歌の頭の中に辛い記憶が蘇ってきた。それはスナイパーとしての記憶だった。

凱歌は右手を見つめるとその手を強く握った。

その時、あの言葉がよぎった。『力は使用者の心次第で、天使にも悪魔にもなる。』

それは、朝、龍牙に質問を訊いた時に、龍牙が言った言葉だった。

『今の自分にこの力を天使に変える事が出来るのか…。』と凱歌は考えていた。

しかし、答えはそう簡単には見つからないものである。

凱歌はベットに横になりながら考えていたがその内、いつしか疲れから眠りについてしまった。

～第99章～ <きなこの決意>

- 翌日 -

朝、9時に食事を済ませ、ミーティングルームに集合する事になっていた。

そして全員しっかりと9時に集合した。一人を除いて…。

その一人とは言い出し主である龍牙が遅刻していた。

10分ほどして龍牙がやってきた。その手に大きな長方形のケースを手にして。

全員が待ちぼうけを食わされ、怒っていた。龍牙は深々と頭を下げ謝った。

そして、気を取り直し話を始めた。

「遅刻すまん。だが、遅刻の理由は準備をしていたものでな。

今日やる事は、こいつに関係がある。」と龍牙は手にしていたケースを静かに開けた。

そこには組み立てられた”ステアーAUG”が仕舞われていた。

凱歌はそれを目にするや、龍冴を見た。

「これで分かると思うが、凱歌。君の実力をこの目で見たい。資料などでは知っているが、それは所詮資料上の事だ。つまり今日は辛いかもしれないが、狙撃訓練をする。

きなこさんには昨日の」と龍冴の話を書きなこが遮った。

「龍冴さん。私にも狙撃訓練に参加させて下さい。」ときなこは強い口調で言った。

「えっ！きなこさんが？なぜだ。」と龍冴が言うと天山が口を開いた。

「経験は？つまり銃を撃った経験、人を撃った経験、人を死なせるほどの怪我をさせた経験は？それに参加したい理由は？」と天山が真剣な声で言った。

きなこは真っ直ぐ天山を見て答えた。

「銃を撃った経験はあります。もちろん人を撃った経験もあります。

でも、人を死なせるほどの怪我をさせた事はありません。

ですから、少しでもホイさんの気持ちが分かりたいんです。」とはっきりと言った。

「人生に一度くらいライフルを手にするチャンスがあってもいいか。

ましてや刑事で、スナイパーと関わったのならあってもいいか。

それで、きなこさんの銃の成績は？毎年調べているだろう？」と龍冴は言った。

その言葉に全員が龍冴を見た。

「何？別に人を撃つ訳ではあるまいし…。ましてや今回使うのは練習用だぞ。」と龍冴は言った。

「私の銃の成績は一応5段階のAです。」ときなこは言った。

「Aね～。分かった。今回は二人とも俺が見る。二人とも来てもらおう。」と言うと龍冴はケースを手に部屋を出た。

- 射撃場 -

そこはとてつもなく奥行きがあった。

完全に反対側が見えなかった。

「ここが我が組織が誇る最高の兵器実験施設であり、長距離と短距離共に出来る射撃場だ。

ここの奥行きは2 km 近くある。

ここでは世界中で日々進歩し続ける兵器の威力実験場も兼ねている。」と龍冴は説明した。

少し間を置いてから更に続けた。

「辛いかもしれないが凱歌に自分の限界点を見せてもらおう。

きなこさんには約束通り俺がライフルの使い方を教える。

試し撃ちをしたら、拳銃の方の練習に入ってもらおう。

使用するライフル、拳銃は全て練習用を使う。当たっても怪我をしない物だ。それでいいな？」と

龍冴は訊いた。きなこは頷いたが、凱歌は納得がいかない様だった。

きなこが凱歌に声を掛けようとしたが龍冴が止めた。

「凱歌、きなこさんに同じ事をして欲しくないと思うのは当然だがこれはあくまでお遊びだ。

それに実際の事を言えば、殲滅作戦時ライフルを手にする事も考えられる。

練習しておいて方がいいとは思わないか？」と龍冴が訊いた。

「それは僕がすればいいんです！何もきなこさんに教える事なんて！」と龍冴に凱歌は詰め寄った。

「これは私が望んだ事なの。だから…。」ときなこが止める。

「でも！」と凱歌が続けようとした時、龍冴が口を開いた。

「いい答えだ。その言葉を待っていた。凱歌、ここではっきりさせておこう。お前は自分の感情を押し込み過ぎている。お前は攻撃がメインになる。きなこさんはもちろん攻撃はするがやはり補助がメインとなる。その立場をしっかりと頭に入れて欲しい。

これは男女とかは関係無い。能力の問題だ。

凱歌にはもう少し前に出てきて欲しかったんで、意見を言える様に、こんな強引な手を使った。これからきなこさんは拳銃の練習をせよ。100%命中する様にね。」と龍牙が笑っていた。

実は事前にきなこさんに協力してもらっていたのである。

真実を知り、騙された事に少々怒ったものの凱歌は二人の思いを素直に受け止めた。

そして、凱歌に”ステアーAUG”を入れたケースを龍牙は静かに差し出した。

少し間を置いてから、凱歌は静かにケースを受け取った。

そして龍牙は射撃場の左側の壁に近づいた。

「ここは銃器の保管庫も兼ねている。

きなこさんはいつも拳銃は支給される物を使っていると思う。

それでは何だかな～なら、ここから自分に合う物を探してもらいたい。

もちろんここにある物は本物そっくりに作られた練習用だ。

ただ重心、反動などは完璧に本物と同じだ。」と龍牙は言うロックを外し、保管庫の扉が開いた。

そこには300以上の拳銃が並んでいた。見たことのある物から全く知らない特徴のある形の拳銃があった。

拳銃の棚とは反対側の棚も開き、そこにはライフルが並んでいた。

「凱歌も自分に合った物を探すといい。でもその前に使い慣れた”ステアー”で実力を見せてもらいたい。

きなこさんはここから色々試してくれ。

凱歌、さぁ実力を見せてもらおうか？」と龍牙の目の色が変わったのを二人は感じた。

そして凱歌はまず200 m に設定された発射地点に立った。

それを少し離れた所から腕組みをした龍牙が静かに見ていた。

きなこはその光景を数ある拳銃を手に取りながらチラチラ見ていた。

”ステアー”をケースから取り出し、手にした凱歌の瞳は一瞬きなこを見た後、決心すると優しいホイからスナイパー王凱歌と化した。

その変化に龍牙は目を細め、ますます真剣さが増していった。

凱歌はマガジンに一発だけ弾丸をセットするとスコープを静かに覗き、集中した。

そして静かに引き金を引いた。サイレンサーが付いている為、とても小さな音だったがとても良く聞こえた。

龍牙はその銃弾が正確に的を射抜いている事を肉眼で確認していた。

凱歌は静かに”ステアー”の台に置き、台にあるスイッチを押した。

的が台の1 m ほどの所にやってきた。そこには正確に中心に穴が開いていた。

そして凱歌は再びマガジンに弾丸をセットした。

距離の50 m ずつ伸ばして次々撃っていった。

結果は400 m までは完璧だったがそれ以降は正確性に問題があった。

「なるほど。400 m か。

まぁ少々直せばもう少し良くなるかもしれないが、いい腕だ。」と龍牙は言った。

きなこはそれを聞いて嬉しくなった。

そして数個の拳銃を手に発射台に立った。

龍牙と凱歌はその手にした銃を目にして、驚いた。

それらはどれも女性に手に余る物ばかりだったが、『きなこさんらしいかも。』と龍牙は思った。

まず弾丸を込め、マガジンをセットしたのは、”デザートイーグル”だった。

男性でさえ発射の反動に振り回せる事があるほどの破壊力のある銃だった。

その大型の拳銃を構えるきなこの姿に二人は美しさよりカッコ良さを感じた。

初めこそ”デザートイーグル”の威力と反動に翻弄されたが、あっという間に慣れ、何無く使いこなした。

しかし、龍牙はそと銃を構えるきなこの背後に回った。

「そのまま、しっかりと狙え。このままだと銃が安定しない。その上、こいつは反動が大きい。

使いこなせればこれほど心強い物は無いかもしれない。

しかし、威力だけが銃の全てではない。」ときなこの銃の構えを正すと龍牙が言い離れた。

その直された構えをしばらく練習すると次の銃を手にいた”ベレットオート9”だった。

この銃は機間拳銃であるので、きなこには初めてだった。

この銃を助で手にしたきなこに龍牙は『男の感覚だな…。』と思った。

「気を付けろ。そいつは連射が出来る。しっかりと押さえないと上に上がってしまうぞ。」と龍牙が教えた。

それを聞き、きなこは両手に力を入れ直した。その真剣な眼差しで的を睨み、引き金を引いた。

引き金を引き続けた為に、3連発で弾丸が発射された。

しばらくきなこはその反動で手が痺れていた。

しかし龍牙と凱歌は顔を見合わせた。その顔は驚きを隠せなかった。

通常、初めの一発目は当たるものの2発目以降は外れてしまうものだ。

しかし、きなこは反動に耐え全体的のほぼ中心を射抜いていた。

それからこの銃が気に入らしく、しばらく撃ち続けていた。

そして、次に手にしたのは、先程までの威力が強く大きい拳銃とは異なり、警視庁から支給されている拳銃である”ザウエルP230”だった。

きなこはこの銃を手にした時、持ち慣れた感じで、すんなり構えた。

「やっぱり使い慣れている方がいいんですか？」ときなこは龍牙に訊いた。

「いや、そうでもない。確かに慣れは大切だが、それは使っている内にどの銃でも同じ。

でも、手に馴染むのならその使い慣れた銃の方がいい。」と龍牙が凱歌に様々なライフルの説明を中断して言った。

きなこは”ザウエルP230”をしみじみと見ながら考え込んでいた。

その姿を龍牙は見ると再び中断していた凱歌への説明を続けた。

こうして夕方まで自分に合った銃器探しは続いた。

きなこは結局あの3つ以外にも試したが、気に入らず、あの3つから絞る事が出来なかった。

凱歌に至ってはどれでも問題が無い分、使い慣れた”ステアー”が妥当という結論に達した。

それ以外に候補として”H&K PSG1”が上がった。

龍牙は決められなかったきなこに、空のマガジンが入った3丁を貸し出した。

「今夜一晩じっくり考えるといい。しかし、用意する事から考えるとあんまり時間が無い。」と

龍牙は言った。いつもの楽しい夕食を終え全員自室へと戻っていた。

きなこは自室で貸し出された3丁を机に並び見比べていた。

凱歌は銃を構えるカッコイイきなこを思い出して複雑な気持ちになった。  
そして、『きなこさんには絶対に、引き金を引くような事はさせない。』と心に決めた。

その時、龍冴は自室で胸を押さえしやがみ込んでいた。  
その息は荒く、冷や汗をびっしりと掻いていた。震える手で薬を注射した。  
しばらくすると落ち付きを取り戻した。その瞳には焦りにも似た光が宿っていた。  
「頼む…。アイツに真実を語るまでは持ってくれ…。」と龍冴は悲痛で本心に満ちた声で呟いた。  
そしてそれぞれの夜は更けていった…。  
この夜は嵐の前の静けさの様に静かな夜だった。

- 続く